

令和2年度
第4回 対策地域内廃棄物処理業務等（減容化処理）に係るアドバイザー委員会
議事要旨

日時：令和3年3月10日（水） 9:00～10:30

場所：WEB会議システムにより開催

出席委員（敬称略）

公益社団法人 全国都市清掃会議 技術指導部長	荒井 喜久雄
国立環境研究所 資源循環・廃棄物研究センター センター長	大迫 政浩
岡山大学大学院 環境生命科学研究科 教授	川本 克也
国立環境研究所 資源循環・廃棄物研究センター 基盤技術・物質管理研究室 室長	倉持 秀敏
京都大学大学院 工学研究科 都市環境工学専攻 教授	高岡 昌輝
国立環境研究所 資源循環・廃棄物研究センター 客員研究員	高田 光康
東北大学大学院 環境科学研究科 教授	吉岡 敏明
京都大学大学院 工学研究科 都市環境工学専攻 教授	米田 稔

議事要旨

I 本日の議事

1. 双葉町減容化施設（中間貯蔵施設）における廃棄物処理その1業務について
2. 双葉町減容化施設（中間貯蔵施設）における廃棄物処理その2業務について

II 検討内容

1. 双葉町減容化施設（中間貯蔵施設）における廃棄物処理その1業務について
新日鉄・クボタ・大林・TPT 特定共同企業体（以降、新日鉄・クボタ・大林・TPT JVと記載）より、業務内容について説明があった。

（1）副資材の調達先について

委員より、仮設灰処理施設の副資材である廃塩ビは、資源の有効利用の観点で用いているものとするが、外部から調達しているのか、との質問があった。新日鉄・クボタ・大林・TPT JVより、廃塩ビは外部から調達している、との回答があった。

（2）処理対象物の性状と薬剤使用量について

委員より、仮設焼却施設の処理対象物は想定より灰分が多いのに、副資材である石灰石の使用量は少なく抑えられているように感じられるが、そのような意識をもって処理を行

っているか、との質問があった。新日鉄・クボタ・大林・TPT JV より、石灰石の使用量は、塩基度を適切に管理することを優先しつつも、極力抑えることを意識している、との回答があった。

(3) 灰処理ばいじんと生成物の放射性物質濃度について

委員より、今回の集計期間の後半において仮設灰処理施設から搬出される生成物の放射性物質濃度は変わらないのに灰処理ばいじんの放射性物質濃度が高くなったのは灰処理ばいじんへの移行率が高くなったためとの理解でよいか、との質問があった。新日鉄・クボタ・大林・TPT JV より、委員の御理解のとおりである、との回答があった。委員より、灰処理ばいじんへの移行率が高くなることは好ましいので、より良い運転を行っていただきたいとコメントがあった。

2. 双葉町減容化施設（中間貯蔵施設）における廃棄物処理その2業務について

JFE・前田特定業務共同企業体（以降、JFE・前田 JV と記載）より、業務内容について説明があった。

(1) 処理対象物の性状と薬剤使用量について

委員より、仮設焼却施設の処理対象物は想定より灰分が多く、助燃を行う必要があると考えるが、どの程度助燃を行っているか、またその場合においても要求水準として求められている燃焼室温度を維持できているか、との質問があった。JFE・前田 JV より、助燃はほぼ常時行っており、その場合においても燃焼室温度は850℃以上を維持している、との回答があった。

(2) 塩基度調整剤の使用量について

委員より、仮設灰処理施設における塩基度調整剤の使用量が設計に対して少ないが、処理対象物の塩基度が想定よりも高かったためか、との質問があった。JFE・前田 JV より、御理解のとおりである、との回答があった。

(3) 処理対象物の性状と排ガス等の関係について

委員より、仮設焼却施設から搬出される主灰及び飛灰は設計よりも多く、排ガス量は設計より少ないがこの要因は何か、との質問があった。JFE・前田 JV より、処理対象物の可燃分及び水分が少ないためである、との回答があった。

以上